

地域包括ケア時代の、医療連携のプラットフォームづくりを目指して

総合診療サポートセンター長 榎本真幸

「地域医療ネットワーク協議会」は、いわゆる5疾病6事業対策を推進するために、愛媛県下の実情を踏まえた医療機関のネットワーク構築について、協議し推進する機関として設置されました。未曾有の少子高齢化の中で、現医療体制は変革を余儀なくされており、身近な生活の場で医療や介護が行われる「地域包括ケアシステム」を中心に据えて検討することが求められています。先端医療を提供する急性期病院においても、できるだけ速やかに、患者さんを地域生活にお戻しすることを重視した体制づくりが急務です。今後行政や医師会を中心に、県の医療ビジョンの骨組みが提案されていく中で、積極的に参画していくことが当協議会の役割だと思っています。地域特性を踏まえて、病院の立場から具体的にどう取り組んでいくかを検討する必要があり、それらを実現する人材育成にも力を入れていかなければなりません。

確かに我が国は国民皆保険の中で、世界最高レベルの医療システムを構築しましたが、一方住民の医療依存度を下げないまま、医療費抑制策が断行され、医療崩壊と言われる現状を招くことになりました。高齢化の中で、患者さんの生活を重視し、患者さんがその人らしい生き方を全うできるような体制が必要とされ、「してあげる医療」から「支える医療」「求められる医療」へと、医療の目的も変化しています。住民の医療への過剰依存を見直し、地域包括ケアシステムの中で、医療及び介護のネットワークに、いかに既存の地域資源を巻き込み活かしていくかが問われています。

当院では、総合診療サポートセンター（TMSC）を昨年度設立し、入院前に患者さんの希望（求め）や苦痛（辛さ・気がかり）を把握し共有することで、退院後の生活を見据えて多職種が連携し、患者さんがスムーズに生活へ戻れるよう、その体制づくりに奮闘努力中であります。そもそも医療も介護も共助のシステムです。患者さんが医療や介護に依存せず、自ら自分らしい生き方ができるように、医療が他の資源と連携して、地域を支えていく必要があると考えています。「べったり医療・べったり介護」ではなく、「ときどき医療・ときどき介護」を目指して、高齢者が医療・介護支援を受けながらも地域の中で活動し貢献できるようになれば、地域は活性化され高齢者にとっても生きがいとなるはず。地方大学病院として、地域医療ネットワーク協議会を核として「医療ビジョン」作成に参画し、またTMSCを通じて、地域包括ケアシステム推進のために、急性期病院の改革を模索し、そして、患者さんの生活を重視した医療の大切さを地域に広げるとともに、学生たちにもしっかりと教育していきたいと夢を抱いています。



PROFILE

ひつもとしんいち◎1979年愛媛大学医学部卒業、医学博士。ヘルスプロモーション、保健医療福祉マネジメントなどを専門に活躍。卒業後同大学助手、愛媛県の保健所長や健康増進課長などを経て、2002年8月より当病院医療福祉センターに。2013年に総合診療サポートセンターを立ち上げセンター長として現在に至る。公衆衛生マインドとぶれないことをモットーに、大学・医療から発信する地域づくりに奮闘中。録画しておいた推理TVドラマを妻と見ることがストレス解消法。



感謝状贈呈式及び懇談会を開催しました。

平成26年6月24日（火）、当院ボランティア団体「いきいき会」の方々に対し、感謝状贈呈式及び懇談会を行いました。ボランティアには現在206名の方が参加しており、今回は活動時間が通算200時間、500時間に達した方など計12名に対し、病院長から感謝状が贈られました。懇談会では、ボランティアの方々の様々な意見が飛び交い、今後も現場の声をもとに、よりよい環境の中での治療等、充実したサービスの提供を目指します。

愛媛大学医学部連携病院長会議組織図

